

刊行にあたって

報道の記録にみる 地震・津波からの復興と社会再編の過程

本書は、2004年に発生したスマトラ沖地震・津波の被害状況、緊急・復興支援、社会の再編のそれぞれについて、地震・津波の最大の被災地となったインドネシア共和国アチェ州を対象に、新聞記事を中心に一般報道情報を時系列に添ってテーマ別・地域別にまとめたものです。『2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅰ』では2004年12月の地震・津波発生時から2005年4月末まで、『2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅱ』では2005年5月から2006年12月末までの時期を対象にしています。

被災地の情報をウェブサイトで提供して支援活動を支える試み

2004年12月26日にスマトラ島沖で発生したマグニチュード9.1の地震およびそれに伴う大津波はインド洋沿岸諸国を襲い、死者・行方不明者が22万人に達する未曾有の災害となりました。震源にもっとも近かったインドネシアのアチェ州は、死者・行方不明者が17万3,000人を超える甚大な被害を受けました。被災地についての情報が十分に伝えられない状況で、日本を含む世界各地から多くの人々が被災地支援のために現地入りしました。

インドネシアやその近隣地域を研究対象とする地域研究者である編者らにとって、この津波災害は他人事ではなく、自分たちに何ができるか考えました。山本博之は、在メダン日本国総領事館でアチェ州からの紛争避難民に対する支援事業のサポートを行った経験がありました。西芳実は、1997年から2000年まで紛争下のアチェ州の大学に留学し、アチェの歴史研究に取り組んでいました。篠崎香織は、華人を中心にマラッカ海峡地域の国境を越えた人の移動を研究テーマとし、津波発生時はマレーシアで長期の調査中でした。

編者らは、現地語（インドネシア語）や現地事情が充分にわからないまま被災地入りして救援活動を行おうとする人道支援の実務者たちの姿を見て、被災地の情報を提供することで支援活動の支えになればと考えました。アチェ州の地震・津波による被害と救援・復興の様子を、インドネシア、マレーシア、シンガポール、そして日本の一般報道情報を収集し、日本語以外のものは日本語に訳して、テーマごとに分類して、2005年1月4日にウェブサイト「2004年スマトラ沖地震・津波関連情報」（<http://homepage2.nifty.com/jams/aceh.html>、以下、スマトラHP）を公開しました。アチェやその周辺地域に長く暮らした経験から、通信環境があまりよくない現地でもアクセスできるように、情報発信では文字情報を中心にしました。

地理的・歴史的背景、報道情報、節目でのアチェ社会の課題を発信

日々の一般報道記事を収集・翻訳・分類して掲載しながら、それらの情報を理解するための背景情報を追加していった結果、スマトラHPは「アチェに関する基本情報」、「一般報道情報アーカイブ」、「短報」の三つの部分から構成されるものになりました。

「アチェに関する基本情報」はアチェ州の地理的・歴史的背景を解説したものです。当時、アチェ州は独立派ゲリラがインドネシアの中央政府に対して武装闘争を行っており、30年に及ぶ紛争状態にありました。救援・復興を進めるにはアチェ州が紛争状態にあることを踏まえる必要があると考え、アチェ州の地図や地理に関する情報だけでなく、歴史・政治的背景や紛争の構造も紹介しました。

「一般報道情報アーカイブ」は、アチェ州の津波被災と救援・復興支援に関する国内外の一般報道情報を収集・翻訳して、テーマや地域ごとに分類したものです。インドネシアで報道されているインドネシア語と英語の情報に加えて、隣国であるマレーシアやシンガポールでの報道も、英語、マレー

語、華語(中国語)の情報を収集して、それぞれ日本語の抄訳を作成して、記事ごとに内容に即した見出しをつけました。日本の報道記事も収集しましたが、特に災害発生から1年目や2年目の節目の時期になるとインドネシア、スリランカ、インドのように複数の地域の様子を一つにまとめた記事が多く見られ、その場合には地域・テーマごとに記事を分割し、それぞれの内容に即して編者らが見出しをつけました。

収集した記事をもとに、現地社会にとっての被害および救援・復興の段階、さらに紛争状態からの和解と復興の過程を総合して、以下の七つの時期に区分しました。

(1)2004年12月26日～2005年2月14日

地震・津波(12/26)の被害に対して世界中から緊急支援が寄せられ、治安当局による活動制限などの困難にもかかわらず救援活動が進められた。

(2)2005年2月15日～3月27日

仮設住宅への入居開始(2/15)により緊急段階から復興段階へ。政府は外国人の活動を制限し、外国軍部隊の撤退期限(3/26)を定めた。

(3)2005年3月28日～4月29日

ニアス沖地震(3/28)とそれへの緊急対応。政府はアチェ・ニアス復興計画を発表した(3/28)。西スマトラで地震(4/10)や噴火(4/12)が続いた。

(4)2005年4月30日～8月14日

復興再建庁(4/30設置)の調整下で復興事業が進められた。州分割案、地方首長選挙、鞭打ち刑の導入などが話題に上り、非常事態が解除された(5/18)。

(5)2005年8月15日～12月25日

政府とアチェ独立派(GAM)の和平合意(8/15)からGAMの武装解除完了(12/19)まで。被災地では住宅再建を中心に復興事業が進められた。

(6)2005年12月26日～2006年3月28日

津波追悼式典(12/26)とアチェ独立派の「国軍」解散(12/27)で被災2年目が幕を開けた。復興事業の主要課題は住宅の再建。

(7)2006年3月29日～12月30日

ニアス島地震から1年(3/28)。復興再建が進められる一方、アチェ州知事選挙(12/11)では元GAM協力者が州知事に当選した。

本書はスマトラHPに掲載した情報を再構成したものです。『2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅰ』では、復興再建庁が設置されて復興事業が本格化する2005年4月30日までの記事を収録しています。2005年3月にニアス島沖で発生した地震はスマトラ沖地震・津波と被災地が重なるため、被害と復興の情報「2005年3月ニアス沖地震 復興関連情報」も本書に含めています。『2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅱ』では、津波災害からの復興・再建が進められるのと並行して政府と独立派の和平が実現し、アチェ州に新体制が発足する2006年12月までの記事を収録しています。

なお、いずれの記事もオンライン版の記事をもとにしているため、紙版の記事とは内容が一部異なる場合があります。また、津波発生前にアチェ州に関する情報が少なかったこともあり、日本語の記事では地名のカタカナ表記が統一されていないなどの表記の揺れが見られましたが、本書ではできるだけ現地の発音に近い表記に揃えるよう心がけました。同様に、団体名や人名の日本語表記もなるべく揃えるように心がけましたが、一部で統一されていないものも残っています。

「短報」は、現地調査の結果も踏まえつつ、被災から半年、1年、2年、3年の節目ごとに、そのときどきのアチェ社会の課題をまとめたものです。

書籍、データベースと合わせて総合的な分析と解釈を

本書は、アチェ州の被災および救援・復興過程に関する一般報道情報を分類して提示することを主な目的としています。個別の記事をどのように読んで解釈するか、そして複数の記事に対する読みと解釈を積

み重ねていくことでどのようなアチェ州の社会像や復興過程が理解できるかについては、編者らによる以下の書籍をあわせてご覧ください。

- 山本博之『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』(災害対応の地域研究1) 京都大学学術出版会、2014年。

津波被災状況をゾーンで捉えることで津波災害に関する報道記事を立体的に捉える工夫をはじめ、災害発生時のさまざまな情報収集・発信について紹介

- 西芳実『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』(災害対応の地域研究2) 京都大学学術出版会、2014年。

アチェ州の津波災害からの約10年に及ぶ復興過程について、紛争と津波からの二重の復興過程と見て、社会的・文化的側面から調査・分析した記録

また、スマトラHPの試みを引継ぎ、アチェ州の自然災害に関する一般報道情報をデータベースに展開し、一部はインターネット上で公開しています (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/db.html>)。

- 災害と社会 情報マッピングシステム

現地語(インドネシア語)のオンライン情報を定期的に自動収集して、テキストを解析して分野と地名を判別し、インターネット上の地図上で表現するシステム。災害発生時に被災と救援の状況を視覚的に把握できる。現在はインドネシアのアチェ州と西スマトラ州で運用しているが、緯度経度つきの地名一覧があれば他地域でも運用可能。

- アチェ津波モバイル博物館

スマトラ島沖地震・津波の被災と復興の10年にわたる景観の経年変化を示す画像資料(約5600件)、新聞記事(約6000件)、生存者の証言(130件)、フィールド調査メモなどを収蔵して地図上で表現したもの。スマートフォンなどのモバイル端末を使ってアチェ州の町全体をオープン博物館にする取り組みのための基盤データベース。

これらの基盤となるデータベースをもとに、利用者や用途に応じてスマートフォン・アプリを開発し、日本語とインドネシア語でそれぞれ提供しています (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app.html>)。

これらの研究活動は京都大学地域研究統合情報センターの「災害対応の地域研究」プロジェクトとして進められています。「災害対応の地域研究」プロジェクトについてはプロジェクト紹介ページ (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/saigai.html>) をご覧ください。

なお、本書のもととなるスマトラHPの作成にあたっては、以下の研究助成を受けました。

- トヨタ財団研究助成「インドネシア・アチェ州の災害対応過程における情報の整理と発信に関する調査研究」(研究代表者:国立民族学博物館・山本博之、2005～2007年)
- 科学研究費補助金(奨励研究)「自然災害の救援・復興活動がアチェ地域紛争の解決過程に果たす役割に関する研究」(研究代表者:東京大学大学院・西芳実、2005～2006年)

編者代表
京都大学地域研究統合情報センター

山本 博之